

ファンタステイック!

豊竹英大夫

(文楽大夫)

三十年ほど前のことだから記憶は少しおぼろげだが、ハワイ文楽公演の折、「ファンタステイック」ということばを耳にし、新鮮な感動を覚えた。滞在していたホテルのフロント係の若いアメリカ人女性が、初めて文楽を鑑賞。翌日、その「曾根崎心中」のクライマックスの道行の情景を思い出しながら、彼女は目を輝かせて「ファンタステイック」と私に言ったのだ。

二〇〇二年のブラジルの首都ブラジリアでの「曾根崎心中」公演。道行の場面で徳兵衛がお初の喉に短刀を突き刺し心中しようとする瞬間、「ノン、ノン」という声が客席から聞こえた。恋人を殺すなんてアカンアカン、と方々から「ノン、ノン」。しかし、大夫・三味線・人形のかもしだす哀調は止まらない。義太夫節のリズムとハーモニは倍加され熱を帯び、人形の所作も大胆に悲劇を訴えかける。そして、哀切の極みからやがて喜怒哀楽を超えた場が生まれ、会場は深い静けさに満たされていった。

現行の「曾根崎心中」は近松門左衛門の原作を昭和三十年に改作したものだ。故野澤松之輔師の秀逸なる脚色と作曲により、実演に半日はかかる原作がなんと一時間半にまとめられた。近松研究者から見れば許しがたいことかもしれないが、文楽入門作品としてこれほど観客の心を捕らえる作品は他にない。故吉田玉男師が徳兵衛の人形を千回以上も遣われた事実がそのことを示している。

今年の六月末から七月初旬にかけて、ロシアで初めての文楽公演が行われた。私にとつては十五ヶ国目の訪問先だ。チェーホフ国際演劇祭2009。場所はモスクワのプーシキン劇場。六月三十日からの八日間公演で演目はまさに「曾根崎心中」。早々とチケット完売したその初日の模様を伝えよう。

初日が開く前、連夜に渡りポリシヨイバレエとモスクワ芸術座の芝居を鑑賞した。客席からモスクワ市民と一緒に熱い感動を味わったせいも、初日の床に上がって「生玉の段」の第一声を発したときは感無量になっ

た。初めて接する文楽に観衆の目は鋭く輝いていた。語りの最中、客席に昨夜の舞台でみた名優オレグ・タバコフの白髪の大きな身体を見つけ、また感激。「天満屋の段」から「道行」と順調に終わり、カーテンコールの折、タバコフ氏が舞台で挨拶する咲大夫兄のところへ花束を抱え駆け寄ってきた。鳴りやまない拍手を受け、野崎村のツレ弾きを披露したら曲に合わせた手拍子が沸き起こる。終演後のレセプションで、ロシアのアニメ作家のユーリ・ノルシュテイン氏は、大夫・三味線・人形の三位一体を指して、「文楽という東洋の演劇にギリシャ悲劇との共通点を感じた」と熱っぽく語られた。

レセプションのあと、興奮を覚ましに赤の広場に出た。白夜とはいえ、夜十一時ともなると屋外はほんのり暗くなり始める。ライトアップされたクレムリン、ワシリ寺院、グム百貨店の巨大なイルミネーション……。カフェでウォッカをなめながら、ロシアのファンタステイックな夜を楽しんだ。